

平成17年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点 (外国語・英語Ⅰ)

1. 今回の調査結果のポイント

【ペーパーテスト調査】

<聞くこと>

- 「応答問題」では、定型表現ではなく、相手の意図を理解して適切に応答するような問題において、設定通過率を下回った。
- 「詳細理解問題」では、道案内のように繰り返し学習している内容に関する問題などにおいて、前回の通過率を有意に上回った。
- 「概要・要点理解問題」では、話された情報を整理して、発話の意図をとらえる問題において、設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めた。

<読むこと>

- 「詳細理解問題」では、すべての問題について設定通過率を上回る又は同程度と考えられる。
- 「概要・要点理解問題」では、設定通過率を上回ると考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めた。
- 「談話構造理解問題」では、前後の文脈から判断して文を並べ換えて補充する問題などにおいて設定通過率を上回ると考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めた。
- 「言語使用知識理解問題」では、設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めた。
- すべての問題タイプにおいて、通過率が前回と有意に差はなかった。

<書くこと>

- 「トピック指定問題」では、前回同一問題において、「4文以上のまとまりのある文章を書きなさい」という指示に対して、5文以上書いた生徒の割合は前回よりも増加した。一方、無解答率は依然として高く、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。
- 「条件指定問題」では、メモを見ながら空所に適切な語句や節を書く問題で、通過率が低く、無解答率も高かった。文脈や節の構造を十分理解していないことが原因と考えられる。
- 「文構造理解問題」では、助動詞を用いた受動態や関係副詞whereなどの問題で通過率が設定通過率と同程度であり、これらの構造が身に付いてきていると考えられる。一方、不定詞の否定やS + V + O + CでCが現在分詞である構文に課題がみられた。

【質問紙調査】

- 「英語の勉強が好きだ」、「英語の勉強は大切だ」、「英語の授業が分かる」に対する生徒の肯定的な回答は、それぞれ40.1%、82.9%、38.3%となっており、前回調査とほぼ同様の傾向がみられた。
- 「自分の言いたいことを英語で書くこと」について「身に付きやすかった」と回答した生徒の割合は14.4%であった。
- 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりするコミュニケーション活動及び整理して書くコミュニケーション活動を行っていることについて、肯定的な回答をした教師の割合はそれぞれ16.7%、18.8%であった。

2. 今回の調査結果の特色

(1) 現行の高等学校学習指導要領（平成11年告示）の改訂の要点等

平成11年告示の高等学校学習指導要領（以下、「現行学習指導要領」）において、国際化の進展に対応し、外国語を使って日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身に付けることがどの生徒にも必要になってきているとの認識に基づき、教育課程上の位置付けとして外国語科を必修教科としている。

外国語に関する科目の構成については、従前の「オーラル・コミュニケーションA」、「オーラル・コミュニケーションB」、「オーラル・コミュニケーションC」を「オーラル・コミュニケーションI」、「オーラル・コミュニケーションII」に変更し、外国語の各科目は「オーラル・コミュニケーションI」、「オーラル・コミュニケーションII」、「英語I」、「英語II」、「リーディング」及び「ライティング」としている。

必修科目については、「オーラル・コミュニケーションI」及び「英語I」のいずれか1科目をすべての生徒に履修させることとし、これらの科目の内容の取扱いにおいて、中学校における学習事項の習熟を図ることを重視している。

教科・科目の内容については、中学校の学習を踏まえながら、四つの領域の言語活動の有機的な関連を図った指導を展開する中で、実践的コミュニケーション能力を育成するとともに、生徒の個に応じた指導を一層充実する観点に立って改善を図っている。

(2) ペーパーテスト調査結果の主な特色

① 過去同一問題についての分析

前回調査（平成14年度調査）と同一問題の通過率を比較すると、前回は有意に上回るものが4問、前回と有意に差がないものが16問、前回は有意に下回るものが1問である。

全問題数	同一問題数	前回は有意に上回るもの	前回と有意に差がないもの	前回は有意に下回るもの
52	21	4<19.0%>	16<76.2%>	1<4.8%>

<聞くこと>

すべての問題のタイプにおいて、通過率が前回は有意に上回る又は有意に差がない問題が全体の8割以上を占めている。

問題タイプ別に述べると次のようになる。

「応答問題」[B 1] (3) では、Can I use your dictionary? という許可を求める表現に対して、相手の意図を汲み取って依頼に応じてものを手渡す Sure. Here you are. という基本的な応答表現は前回は有意に上回っている。

「詳細理解問題」では、道案内に関する問題 [A 2] (2) のように、一つの話題の中で情報量が多くても、その情報を整理しやすいものは前回は有意に上回っている。

「概要・要点理解問題」[B 3] (4) では、前回と有意に差がない。

<読むこと>

すべての問題タイプにおいて、通過率が前回と有意に差がない。

<書くこと>

すべての問題タイプにおいて、通過率が前回と有意に差がない。

ただし「トピック指定問題」[B 8] では、「4文以上のまとまりのある文章を書きなさい」という指示に対して、5文以上書いた生徒の割合は前回よりも約8ポイント増加し、35.6%となっている。

② 内容・領域別にみた分析

全体では通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題数は52問中30問であり、全体の問題数の半数以上を占めている。内容・領域別の状況は以下のとおりである。

内容・領域	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
聞くこと	20	4<20.0%>	5<25.0%>	11<55.0%>
読むこと	18	10<55.6%>	5<27.8%>	3<16.7%>
書くこと	14	0<0.0%>	6<42.9%>	8<57.1%>
合計	52	14<26.9%>	16<30.8%>	22<42.3%>

<聞くこと>

内容・領域	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
聞くこと	20	4<20.0%>	5<25.0%>	11<55.0%>
応答問題	6	0	1	5
詳細理解問題	6	0	2	4
概要・要点理解問題	8	4	2	2

英語を「聞くこと」については、「応答問題」、「詳細理解問題」、「概要・要点理解問題」のうち、「応答問題」及び「詳細理解問題」について通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が、全体の問題数の半数に満たない。

一方、「概要・要点理解問題」では、設定通過率を上回ると考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めている。

問題タイプ別に述べると次のようになる。

「応答問題」では、例えば病院での会話で、医者对患者に対する質問 What's wrong? に対して、話し手の意図を理解せず、Fine, thank you. とあいさつに関連する定型表現で応えるなど、文形式でなく内容をとらえて応答する問題 [A1] (1) については、前回の調査と同様定着が十分でない。また、定型表現ではなく相手の意図を理解して適切に応答するような問題 [A1] (3) については、通過率が設定通過率を大きく下回っており、課題を残している。

「詳細理解問題」では、複数の詳細な情報（例えば、数字等）を聞き、理解する問題 [B2] (1) においては通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

「概要・要点理解問題」では、話された情報を整理して、発話の意図をとらえる問題においては通過率が設定通過率を上回ると考えられる。

<読むこと>

内容・領域	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
読むこと	18	10<55.6%>	5<27.8%>	3<16.7%>
詳細理解問題	4	1	3	0
概要・要点理解問題	6	5	0	1
談話構造問題	4	3	0	1
言語使用知識理解問題	4	1	2	1

「読むこと」については、「詳細理解問題」、「概要・要点理解問題」、「談話構造理解問題」、「言語使用知識理解問題」のすべてについて、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めている。

問題タイプ別に述べると次のようになる。

「詳細理解問題」では、いくつかの情報を整理して正確に内容を読み取ること [B4] (2) は定着していると考えられる。

「概要・要点理解問題」では、本文中の平易なキーワードを手掛かりに解答できるような問題 [A5] (1) は通過率が設定通過率を上回ると考えられる。一方、文章全体の流れを読み取り、概要をとらえる問題 [A5] (2) では通過率が設定通過率を下回ると考えられる。場面や状況を正しく理解することができないために、誤ってとらえた一部の情報にとらわれて誤答を選ぶ傾向がある。

「談話構造理解問題」では、接続詞や意味のつながりを手掛かりにし、談話構造を理解すること [A6] (2) は定着していると考えられる。しかし、接続詞などの手掛かりがなく、前後の文によって空所にふさわしい語句を補充する問題 [A6] (1) では、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。文章の流れを理解せず、知っている成句を当てはめて解答したと考えられ、前回調査と同様の傾向がみられた（平成14年度高等学校教育課程実施状況調査報告書（英語 I） p. 66参照）。

「言語使用知識理解問題」では、手紙や電子メールを読んで書き手の意図を理解することは定着していると考えられる。しかし、一部の理解できた内容やくり返し出てくる言葉だけで判断して解答したと考えられる問題 [A7] (1) では、通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

<書くこと>

内容・領域	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
書くこと	14	0 <0.0%>	6 <42.9%>	8 <57.1%>
トピック指定問題	2	0	0	2
条件指定問題	6	0	2	4
文構造理解問題	6	0	4	2

「書くこと」については、「トピック指定問題」、「条件指定問題」、「文構造理解問題」のうち、「文構造理解問題」において、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が、全体の問題数の半数以上を占めている。

一方、「条件指定問題」においては、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が、全体の問題数の半数に満たない。また、「トピック指定問題」はA, Bどちらの問題においても通過率が設定通過率を下回ると考えられる。

問題タイプ別に述べると次のようになる。

「トピック指定問題」は無解答率が [A8] で28.5%、[B8] で22.8%と、前回の調査結果と同様に高い。また、3文以下しか書けなかった生徒の割合も、[A8] で17.0%、[B8] で17.6%となっており、低い通過率の大きな原因となっている。

一方で、「4文以上のまとまりのある文章を書きなさい」という指示に対して、5文以上で書いた生徒の割合は、4文で書いた生徒の割合よりも、[A8] で22.5%、[B8] で14.1%高い。また、「文章の構成がよい」と判断されたものの割合は、4文で書いたものより5文以上書いたものの方が高くなっている。

「条件指定問題」は、関係代名詞を使って絵の中の人物の説明をする問題 [B9] (1), (2) は比較的書けているが、メモを見ながら空所に適切な語句や節を書く問題 [A9] では、send/give you a CD as a birthday present などと書くべきところ [A9] (1) で、動詞を入れずに a CD とだけ書いたものや、present for you などと文脈に合わないものを書いたものがみられた。また、you are/were interested in Japanese music などと書くべきところ [A9] (2) で、interested in Japanese music などと、be 動詞だけでなく主語も脱落したものが多く見られ、

節の構造を十分理解していないと考えられる。さらに、文脈から書くべき内容を考えて書く問題〔B9〕(3)では、通過率が設定通過率を下回ると考えられるだけでなく、無解答率も高かった。

「文構造理解問題」では、「助動詞を用いた受動態」〔A10〕(1)、「関係副詞 where の用法」〔A10〕(2)、「S+V+O+that 節」〔A10〕(3)、「関係代名詞 what の用法」〔B10〕(2)については、通過率が設定通過率と同程度であった。

一方、「不定詞の否定」〔B10〕(1)では not touch to it や to not touch it などの誤答が目立ち、また「S+V+O+CでCが現在分詞である構文」〔B10〕(3)では、It kept reading me や It reading kept me などのように主語 It の後を意味が通るように正しく並べられないものが多く見られ、これらの文構造を十分理解していないと考えられる。

③ 評価の観点別にみた分析

評価の観点別に通過率と設定通過率を比較すると、通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が、「理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」において全体の問題数の半数以上を占め、「表現の能力」において半数に満たない。

評価の観点	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	2	0<0.0%>	0<0.0%>	2<100.0%>
表現の能力	14	0<0.0%>	6<42.9%>	8<57.1%>
理解の能力	38	14<36.8%>	10<26.3%>	14<36.8%>
言語や文化についての知識・理解	14	4<28.6%>	6<42.9%>	4<28.6%>

(注) 複数の評価の観点にまたがる問題があるため、前記の表の問題合計数と異なる。

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は「書くこと」の「トピック指定問題」において、指定された文数より1文以上多く書いた生徒を「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を強く示したとみなしている。

「4文以上のまとまりのある文章を書きなさい」という指示に対して、5文以上で書いた生徒の割合は、〔A8〕で37.2%、〔B8〕で35.6%である。また、無解答率はそれぞれ28.5%、22.8%となっている。

イ 表現の能力

「表現の能力」は、「書くこと」にかかわる問題を通してみている。設定通過率との比較においては、前回調査（設定通過率を上回ると考えられるもの：1問、同程度と考えられるもの：7問、下回ると考えられるもの：6問）から改善されたとはいえない状況である。

ウ 理解の能力

「理解の能力」は、「聞くこと」にかかわる問題と「読むこと」にかかわる問題を合わせた結果を通してみている。

設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めている。

エ 言語や文化についての知識・理解

「言語や文化についての知識・理解」は読むことの「談話構造理解問題」及び「言語使用知識理解問題」と「書くこと」の「文構造理解問題」を合わせた結果を通してみている。

設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占めている。

(3) 質問紙調査の結果の概要

① 生徒質問紙調査

ア 勉強への意識や授業の理解状況

「英語の勉強が好きだ」という質問に対して40.1%の生徒が肯定的に回答した一方で、「英語の勉強は大切だ」という質問に肯定的に回答した生徒は82.9%であり、勉強への意識は前回調査と同様の傾向がみられた。また、「英語の授業がどの程度分かりますか」という質問に対して、「よく分かる」「だいたい分かる」と回答した生徒の割合は38.3%であるのに対し、「分からないことが多い」「ほとんど分からない」と回答した生徒の割合は29.5%で、授業の理解状況も前回調査と同様の結果であった。

質問事項	肯定的な回答の割合	否定的な回答の割合
「英語の勉強が好きだ」	40.1% <40.1%>	55.3% <55.1%>
「英語の勉強は大切だ」	82.9% <83.1%>	14.1% <13.7%>
「英語の授業がどの程度分かりますか」	38.3% <37.6%>	29.5% <30.8%>

※< >内は平成14年度調査結果

イ 勉強の有用性についての意識

英語を勉強すれば自分にどのようなことができるかという質問に対して、「普段の生活や社会生活の中で役立つ」、「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができる」、「国際的な視野を広げることができる」という理由のうち、「国際的な視野を広げることができる」に対して肯定的な回答をした生徒の割合は79.5%で最も高く、逆に、否定的な回答の割合は16.0%であった。また、その差が63.5ポイントとなっており、割合の差も最も大きい。

「英語を勉強したい」と考える理由として、「入学試験や就職試験に役立つ」、「自分の好きな仕事につける」、「普段の生活や社会生活の中で役立つ」、「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができる」、「国際的な視野を広げられる」に対して肯定的に回答した生徒の割合は、いずれも半数以上を占めている。一方、「将来、英語の勉強を生かした仕事をしたい」に対して肯定的に回答した生徒の割合は25.9%で、職業レベルで将来の英語活用を意識する生徒は全体の4分の1程度であった。

ウ 英語を使おうとする意欲

日常生活において英語を使おうとする意欲については、前回調査とほぼ同様の傾向がみられ、具体的には、「外国人が英語で話しかけてきたら、あなたはどうしますか」という質問に対して、英語か日本語か、又はその両方を交えて受け答えすると回答した生徒の割合は、91.4%となっている。また、「だまっている」、「その場からにげる」と否定的な回答をした生徒合計の割合は7.8%であった。平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査では、英語か日本語で受け答えすると肯定的に回答した中学生は第1学年80.7%、第2学年81.4%、第3学年84.5%と学年が上がるにつれて増加傾向にあり、高校段階に入って更にその割合が増加した。否定的な回答も学年毎に18.1%、17.5%、14.6%と減少し、高校の7.8%と比較しても英語を使って対応してみようとする意欲が一層高まっていると考えられる。一方、「外国の生徒と英語でメール交換ができるようになるとの紹介があったら、あなたはどうしますか」という質問に対しては、「すぐに紹介をしてもらい、メールを書いてみる」と肯定的に回答した生徒は16.0%で前回調査(17.7%)と余り変化はなく、逆に「英語でのメール交換はしたくないので、紹介を受けようとは思わない」と否定的に回答した生徒も32.8%と前回調査(31.7%)と同様の傾向がみられた。

② 教師質問紙調査

ア 授業形態

「ティーム・ティーチングや少人数指導を実施していますか」という質問に対して28.5%の教師が肯定的に回答し、前回調査(19.8%)より増加傾向がみられる。さらに、「その実施に当たって学習の実現状況が十分でない生徒への対応という点を重視したか」は「いいえ」が

15.8%であるのに対し、81.8%の教師が「はい」と答え、その割合が高い。

イ 指導方法

「英語を読んで、情報や話し手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりするコミュニケーション活動を行っていますか」という質問に対して66.3%の教師が肯定的に回答した。一方、「英語を聞いて、情報や話し手の意向などを理解したり、概要や要点をとらえたりするコミュニケーション活動を行っていますか」、「聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりするコミュニケーション活動を行っていますか」、「聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書くコミュニケーション活動を行っていますか」という質問に対して肯定的に回答した教師は、それぞれ38.2%、16.7%、18.8%であり、読むことを中心にコミュニケーション活動を行っている割合が高い傾向にある。

また、「コミュニケーション活動に必要な基本的な文型や文法事項などを理解し、実際に活用できるように指導を行っていますか」という質問に対しては、81.4%の教師が肯定的な回答をした。一方、「まとまりのある文章を音読したり暗唱したりして、英語の文章の流れに慣れるようにする指導を行っていますか」という質問に対して肯定的に回答したのは67.9%で、中学校（平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査）では3学年とも90%を超えていることと比較すると低い割合となっている。

「宿題を出していますか」、「発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか」という質問に対しては、それぞれ58.4%、53.2%の教師が肯定的に回答しており、前回調査（50.2%、45.4%）より増加傾向にある。

③ 生徒質問紙調査と教師質問紙調査との比較

生徒質問紙調査では、授業で行われている学習を生徒が「身に付きやすかった」か「好きだった」かを質問している。同様に、教師質問紙調査では、授業で行われている学習が「生徒にとって身に付けやすい」か「生徒は興味を持ちやすい」かを質問している。次の表は、それぞれの結果を整理したものである。

	質問事項	話されている英語を聞き取ること 【聞くこと】	自分の言いたいことを英語で言うこと 【話すこと】	教科書などに英語で書かれた内容を 読み取ること 【読むこと】	自分の言いたいことを英語で書くこと 【書くこと】
教師	「生徒にとって身に付けやすい」	23.7%	3.5%	54.8%	5.8%
生徒	「身に付きやすかった」	24.1%	12.7%	34.6%	14.4%
教師	「生徒は興味を持ちやすい」	68.1%	47.9%	32.6%	28.0%
生徒	「好きだった」	30.6%	21.7%	28.4%	19.9%

「自分の言いたいことを英語で言うこと」と「自分の言いたいことを英語で書くこと」において「身に付きやすかった」と回答している生徒は、ともに15%を下回っていた。また、同様の領域に対して「生徒にとって身に付けやすい」と回答している教師の割合は5%前後であった。このことから、生徒も教師も「話すこと」、「書くこと」については「聞くこと」、「読むこと」より難しいという認識を持っていると考えられる。

一方、教師が「生徒は興味を持ちやすい」と回答している割合は領域によって異なるが、生徒が「好きだった」と回答している割合の領域による差は教師ほどみられない。具体的には、生徒教師ともに最も高かった「話されている英語を聞き取ること」と最も低かった「自分の言いたいことを英語で書くこと」の差が教師は40.1ポイントであるのに対し、生徒は10.7ポイントであった。さらに、「聞くこと」、「話すこと」の領域において「好きだった」という生徒の回答は、生徒の「興味を持ちやすい」という教師の回答を大きく下回っていた。これらのことから、教師の認識と生徒の興味・関心の度合いには部分的に差異があると考えられる。

(4) 質問紙調査とペーパーテストとの関係

生徒質問紙調査結果から、生徒の英語の大切さに対する意識は82.9%と高く、また、英語を使ってみようとする意欲も中学校段階から比べて伸びている。一方、教師質問紙調査において、指導形態は個に応じた指導を充実させるためより学習の実現状況が十分でない生徒への対応を重視する傾向にありながら、教師の学習者（生徒）理解は十分とはいえず、指導方法にも教師によって偏りがあり、ペーパーテスト結果にも影響を与えていると考えられる。

具体的には、教師質問紙調査において、「コミュニケーション活動に必要となる基本的な文型や文法事項などを理解し、実際に活用できるようにする指導を行っていますか」という質問に81.4%が肯定的に回答している。一方、「聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書くコミュニケーション活動を行っていますか」という質問にはわずか18.8%しか肯定的に回答しておらず、基本的な文型や文法事項などの指導が理解のレベルにとどまり、その次のコミュニケーション活動、たとえば「書くこと」において実際に活用できる段階までには高められていないことをうかがわせる。このことは、ペーパーテストのうち「書くこと」にかかわる表現の能力において、「文構造理解問題」では通過率が設定通過率を上回る又は同程度と考えられる問題が全体の半数以上を占めているのに対し、「トピック指定問題」、「条件指定問題」となると通過率は設定通過率を下回ると考えられる問題が全体の問題数の半数以上を占め、無解答率も高いという結果となって表れている。さらに、生徒及び教師質問紙調査の中の「自分の言いたいことを英語で書くこと」について、「生徒にとって身に付けやすい」と回答した教師が5.8%、「身に付きやすかった」と回答した生徒が14.4%と、「聞くこと」、「読むこと」と比べて低く、四つの領域におけるバランスのとれた実践的コミュニケーション能力の育成には課題があると考えられる。

3. 今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点

○ 意味をとらえて応答することや、情報を整理しながら要点を理解できるようにする指導

「聞くこと」については、文形式ではなく状況と意図をとらえて応答することを指導していく必要がある。具体的には、薬局での会話で What can I do for you? と尋ねられて、必ずしも can を用いて応えるのではなく、I think I have a cold. のようないくつかの応答の仕方があることを指導していく必要がある。定型どおりの応答ではコミュニケーションが成立しないような場面や機会を設定し、練習する必要がある。

道案内のように中学校から繰り返し学習している内容を理解する力は身に付いていると考えられる。高等学校においては、更に様々な場面を意図的に設定し、既習事項を関連づけた英語を聞かせるなどの活動を通して、意味内容を理解させる練習が必要である。情報量が多い場合や、複雑な内容である場合には、メモを取って要点をまとめるような練習をさせる必要がある。

○ 複数の情報を整理して概要・要点を正確に読み取ったり、言語の使用場面と働きを意識して書き手の意向を理解したりする活動の充実

「読むこと」については、「概要・要点理解問題」の分析結果から、長い文章を読んで、おおよその内容や全体的な流れ、読み落としてはならない重要なポイントなどを読み取らせる指導が必要である。

「言語使用知識理解問題」の分析結果から、まとまりのある文章を読む際に、言語の使用場面と働きが有機的に組み合わされて情報や考えが伝えられていることを踏まえて、書き手の意向などを適切に理解させる指導が大切である。

○ 書く意欲及び表現力に応じた指導と文構造・語法の定着をはかりながら文脈に応じた文を書けるようにする指導

「書くこと」については、「トピック指定問題」の分析結果から、書く意欲及び表現力における二極化傾向への対応が課題であると考えられる。書く意欲及び表現力が比較的高い生徒

に対しては、さまざまなトピックを設定して書かせる指導とともに、時には同じトピックで複数回書かせることで、文章の完成度をより高めさせる指導も必要である。また、生徒同士で評価しあう活動を取り入れることで、身近な相手とのやりとりを通して正確さや適切さをより高めさせる指導も効果的である。一方、書く意欲及び表現力が比較的低い生徒に対しては、英文を書く基本的な知識が十分身に付いていないことが、その要因の一つと考えられるので、基本的な文構造を十分に理解させ定着をはかりながら、単一の文を書けるようにする指導で止まらずに、習得した文構造を使って書ける適切なトピックを設定して、まとまった内容の文章を書かせる指導も継続的に行いたい。

「条件指定問題」、「文構造理解問題」の分析結果から、複文における節の構造を理解させることや、文章の流れや語法を考えながら正確な英文を書くことができるように指導することが求められている。正確な文構造や語法の定着をはかると同時に、習得した知識を使って生徒の身近なことについて英文を書かせたり、文章の流れを読み取って、その後続く適切な英文を書かせたりする指導が必要である。

(参考) 問題タイプの詳細について

本調査では、＜聞くこと＞、＜読むこと＞、＜書くこと＞の三つの領域で調査を行い、それぞれの領域においては、以下のような問題タイプを設定した。

<聞くこと>

聞くこと	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
応答問題	6	0	1	5
詳細理解問題	6	0	2	4
概要・要点理解問題	8	4	2	2
合計	20	4	5	11

○ 応答問題

応答問題は、2文の英語からなる話しかけを聞いて、それにふさわしい応答を選択する問題である。また、それぞれの問題には、その会話が行われている場面が日本語で示されている。

この問題は、英語の音声理解の能力をみると同時に、「話すこと」の能力も間接的にみようとしている。

また、聞くことを通して「理解の能力」をみるとともに、応答を通して「表現の能力」を推測する。

○ 詳細理解問題

絵を見ながら会話を聞いて、その詳細が聞き取れているかどうかをみる問題である。問題形式は、会話を聞き、その後の質問の答えとしてふさわしい人・場所・物品を選択するものである。

この問題は、英語の音声理解の能力、特に、詳細な情報に関する理解の能力をみようとしている。

また、「理解の能力」を「聞くこと」を通してみる。

○ 概要・要点理解問題

5～7文程度の英文を聞いて、その概要や要点が聞き取れているかどうかをみる問題である。問題形式は、英文を聞き、その後続く質問の答えとして、最も適切なものを選択するものである。解答に当たっては、複数の箇所にもわたる情報を統合したり、取捨選択したりすることを求めている。

この問題は、英語の音声理解、特に、概要や要点に関する理解をみようとしている。

また、「理解の能力」を「聞くこと」を通してみる。

(注)「聞くこと」における発話速度について

「聞くこと」のテスト問題において収録された英語の発話速度は、およそ150語／分である。この速度は平成14年度高等学校教育課程実施状況調査と同じである。

<読むこと>

読むこと	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
詳細理解問題	4	1	3	0
概要・要点理解問題	6	5	0	1
談話構造問題	4	3	0	1
言語使用知識理解問題	4	1	2	1
合計	18	10	5	3

○ 詳細理解問題

英文を読んで、その内容に合った絵、図表、日本語の記述を四つの中から選択する問題である。絵や図表、日本語の記述との一致をみるために、詳細な情報の読み取りが必要となっている。

なお、選択肢が絵や図表の場合には英文の総語数を60語から80語程度に、選択肢が日本語の記述文の場合には90語から130語程度になるようにしている。

この問題は、英語の読解力、特に、詳細な情報に関する理解の能力をみようとしている。

また、「理解の能力」を「読むこと」を通してみる。

○ 概要・要点理解問題

ある程度のまとまりのある長さの英文（210～230語程度）を読んで、その概要や要点を答える問題である。問題形式は、内容の正誤判定の多肢（4択）選択式である。選択肢は日本語である。解答に当たっては、複数の箇所にもわたる情報を統合したり、取捨選択したりすることを求めている。

この問題は、英語の文章理解の能力、特に、概要や要点に関する理解の能力をみようとしている。

また、「理解の能力」を「読むこと」を通してみる。

○ 談話構造理解問題

英文を読み、前後の文脈から判断して、文中の空所にふさわしい語句を補充したり、文を並べ換えて補充したりする問題である。問題形式は、多肢（4択）選択式である。解答に当たっては、英文を文法的な知識や意味のつながりを手掛かりにして理解することを求めている。

この問題は、英語の文章理解の能力を談話構造という観点からみようとしている。

また、「理解の能力」を「読むこと」を通してみるとともに、言語についての「知識・理解」についても「読むこと」を通してみる。

○ 言語使用知識理解問題

英文を読んで書き手の意図を推測する問題である。手紙や電子メールを題材とし、書き手の意図を表した最後の部分が省略されている。この部分を推測し、日本語で与えられた四つの選択肢の中から書き手の意図を最も表した文を選ぶというものである。

この問題は、英語の文章理解の能力を言語使用という観点からみようとしている。

また、「理解の能力」を「読むこと」を通してみるとともに、言語についての「知識・理解」も「読むこと」を通してみる。

<書くこと>

書くこと	問題数	上回ると考えられるもの	同程度と考えられるもの	下回ると考えられるもの
トピック指定問題	2	0	0	2
条件指定問題	6	0	2	4
文構造理解問題	6	0	4	2
合計	14	0	6	8

○ トピック指定問題

与えられたトピックについて、自由に書く問題である。問題には英文の書き出しが示してある。トピックを指定する際に、生徒にとって身近な話題を取り上げ、生徒の知識や体験の有無によって取り組みやすさに差が出ないように配慮している。また、書く量については、ある程度まとまりのある文章を書かせるために、4文以上という下限を設けている。解答は、書かれている文の数及び文章の構成という二つの観点から類型に分け評価することとし、その際に綴りや格変化等の誤りについては意味が理解できる範囲で許容している。

この問題では、書くべき内容を自分で考えて、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く能力があるかどうかをみようとしている。文章の構成を評価する基準として次の3点を設

定した。

- (ア) 明確な理由が述べられている。
- (イ) 単なる文の羅列に終始することなく、順序よく書かれている。
- (ウ) 内容理解に支障をきたすような、語順・時制等の誤りがない。

また、「表現の能力」を「書くこと」を通して見るとともに、「話すこと」の能力も間接的にみる。さらに、「関心・意欲・態度」について、書かれた文の数をもとに推測する。

○ 条件指定問題

場面や状況など、指定された条件に応じて書く問題である。

この問題では、書くべき内容を指定し、それを英語で表現する能力があるかどうかをみようとしている。

また、「表現の能力」を「書くこと」を通してみるとともに、「話すこと」の能力も間接的にみる。

○ 文構造理解問題

会話の中にある文の単語の並べ換えを行う問題である。日本語の補助はなく、文脈により、構成すべき文の内容が規定されている。並べ換える語の数は、4～6語である。

この問題は、文脈に応じた適切な内容の英文を正しい語順で書く能力があるかどうかをみる。

また、「表現の能力」を「書くこと」を通してみるとともに、「知識・理解」についても「書くこと」を通してみようとしている。